

ちょっと寄り道ー5 セビリアの朝食



ホテルの名はエル・レイ・モーロ、タクシーも途中で降りて歩かされる路地の奥にあるのですが、こんな素敵なパティオで摂った朝食は最高でした。いつかまたここに来て、その時はこのパティオで一日中本でも読んで過ごしたいと思わせるくつろぎの空間です。

スペインの古い街の特長的な構造は何と言ってもパティオでしょう。中庭のことですが、それぞれの地方の気候や習慣、それになんと言っても、中世のイスラム教徒（というより海賊）からの防御の為などの背景を垣間見ることのできる貴重な歴史の証人的な空間です。

パティオは古代ローマ時代から地中海地方の住宅に見られるものです。防禦と共に夏の猛暑をやり過ごすために、風通しを良くするために考え出されたのでしょう。

もちろん、防禦の必要性などは無くなった現代ですから、その使われ方は様々です。わたしたちがセビリアで選んだホテルは迷路のような旧市街地のど真ん中にある小じ

んまりした宿でしたが、外からは到底伺えない素晴らしいパティオを持っていました。路地を抜けてくる風が、ホテルの玄関から洞窟のような廊下を通り過ぎる時に冷やされて、実に爽やかです。

古代ローマのパティオに必ずあったのが噴水だそうですが、その起源が今も守られているのでしょうか。リスボンのサン・ジェロニモ修道院のパティオにも、ポルトにあったエンリッケ航海王子の生家でも、わたしが見たパティオには必ず、今は使われているかいないかは別にして、噴水とその水を受ける小さな池か水盤がありました。

この古い住宅を改造したらしいホテルにさえ、ローマから脈々として伝わる文化が健在であることに、わたしは涼しさだけでは無い安堵感を感じました。

ところで、今回の旅程を無事終えたので、今夜はゆっくりとワインを飲むことにしました。別にこれまでのまちで禁酒していたわけではありませんでしたが、やはり旅の目的を忘れることはできませんでしたから。

旧市街からグアダルキビ河を渡った反対側の河畔にテラスのある、リオ・グランデというレストランを選びました。冷房の効いた室内ではなく、テラスのテーブルを選んだのですが、夕暮れからの河面を吹き渡る風が気持ちよく、対岸のセビリアの旧市街地と大聖堂の塔の見える景色も最高でした。

セビリアは河口から70キロも遡った内陸地のまちですが、それでもアンダルシア地方



イベリア半島の朝食のメニューはどこでもこんなものですが、セビリアではパティオという空間が調味料の役をして、実に美味しい食事でした。

の中心都市であり、スペインの外港のひとつだった歴史を表すように、セビリアの名物は海鮮フライということです。もちろん、それを前菜に取りました。小アジ、イカ、エビ白身魚の切り身などを唐揚げ風にあげたものができました。名物だけあって満足のいく味でした。ザビエルの故地にちなんで頼んだバスク地方の中心を流れるエブロ川の源流地帯で作られるリオハの白にもぴったりの感じでした。

セビリアは馬具屋が多かったということで、今でも革製品が有名で、まちのあちこちに有名なブランドショップがあります。その原料である皮革をまとっていた中身の方も、当然美味しいだろうということで、サーロインのステーキを頼みました。これが和牛とは違って赤身のオレイン酸たっぷりの肉で、程よい硬さがわたし好みでもありました。

グアダルキビル河を挟んで対岸に大聖堂のヒラルダの塔やアルカサルを眺めながら、少し生暖かいけどさらっとした川風に吹かれていると、日本の日常を忘れさせてくれます。わたしにとっては、やはり海より川の方が落ち着きます。次はまたアマゾン河のどこかの河畔で、現地の地酒を飲みながらのんびりしたいものです。



リオハの白の後、メインの肉に合わせて、アンダルシアに敬意を表するために、飲んだことのないセビリアの赤を頼みました。この馬の絵のついたパゴス・デ・フエンテ・レイナでしたがこれがうまかったのです。さすが馬具で有名なセビリアで、馬の絵をラベルにするだけのことにはあるなど変に感心しました。

